ケンブリッジ大学留学体験記

ケンブリッジ大学理論・応用言語学研究科　**村上　明**
Akira Murakami

留学まで

私は現在、英国ケンブリッジ大学の Department of Theoretical and Applied Linguistics（DTAL）というところに在籍している。2010 年の 1 月に博士課程に入学し、現在 2 年目が終わろうとしているところである。学部・修士課程は日本で修め、在学中に留学の経験はない。研究分野は第二言語習得と呼ばれる、学習者の第二言語（例えば典型的な日本人にとっての英語）の習得過程とそれに影響を与える要因の解明を目的としている学問である。その社会への応用として英語教育が挙げられる。

私は修士過程に進学した時から研究者を志すのであれば PhD は国外で取りたいと考えていた。その理由は主に、(1)私の分野では多くの研究者が国外で学位を取得しているということと、(2)国外の大学院には優秀な学生が集まる可能性が高くその中で勉強・研究したいと考えたことである。(1)に関して言えば、私の分野で修士号・博士号を共に国内で取得して現在研究職に就かれている方を、私はほとんど存じ上げない。中学校や高等学校の英語教員を経て大学教員へというパターンはあるが、私のようにストレートマスターから博士課程へ進学しそのまま研究職を目指す場合、国外で学位を取得することは一つの登竜門と呼べるのではないだろうか。(2)については、そのような事情から国外、特に分野柄英語圏の大学院には優秀な学生が集まる可能性が高い。そのような環境で切磋琢磨することにより自分を伸ばし、研究者としての自信を得たいと考えた。

国や大学にもよるが、国外の大学院へ進学する際にネックとなりやすいのは授業料を始めとする経済的負担である。特に英米の大学では年間授業料が数百万円に上ることもあり、よほど裕福な家庭で育ったのでなければ奨学金の受給を検討することになるだろう。私は修士課程入学時には留学のための奨学金に関する知識は全くなかったのだが、大学院入学直後に先輩が日本学生支援機構（JASSO）の留学生交流支援制度の奨学金の前身である文部科学省の奨学金を受け、PhD 取得を目的に英国の大学に留学されることを知った。当該奨学金は授業料のほか生活費までカバーしており、返済の必要もないとのこと。このような奨学金があるのであれば国外での PhD 取得も可能かもしれないと感じたのもこの頃であった。翌年に今度は修士課程の同期が同じ奨学金でやはり英国の大学に留学するのを知り、この思いは更に強まった。留学を対象としたほかの奨学金も調べてみたがこれほど条件の良いものは見つからず、最終的には日本では JASSO の奨学金のみに応募した。

さて、留学と言っても英語圏の大学であればどこでも良いわけではない。ケンブリッジ大学を選んだのは私の研究テーマ周辺に強いと考えたからである。私が博士課程で行いたいと考えていた研究は学習者コーパスに基づく第二言語習得研究である。学

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

習者コーパスとは平たく言えば学習者（例えば日本人英語学習者）の作文や発話を通常大量に電子化したもので、それに誤っている箇所（エラー）や品詞などの情報を付与することにより、学習者のエラーパターンの抽出などを行うことができる。学習者コーパスの上位分野であるコーパス言語学は伝統的に英国が強く、国外でコーパスを用いた研究を行うのであれば英国が良いのではないかと考えていた。さらに現在ケンブリッジ大学が中心となってEnglish Profile Programmeという学習者コーパスを用いた巨大なプロジェクトが進行しており、その中心地にいれば学習者コーパス関係で面白いことが起こるのではないかと考えたため、ケンブリッジ大学を志望した。丁度その時期にケンブリッジ大学の研究者が学会の基調講演で日本にいらっしゃるなどの様々な幸運が重なり、奨学金・ケンブリッジ大学の双方の合格通知を頂けた。

ケンブリッジでの生活

ケンブリッジは人口13万人ほどの小さな街で、徒歩30分程度で横断が可能である。典型的な学生街で、学生が帰省する時期、特にクリスマス前から新年にかけては街全体が静まり返る。一般的な日本の大学のようなキャンパスという概念はなく、研究科やCollege（後述）、事務局などの大学の建物が街中に点在していて、街と大学が一体となっている。大都市のような面白さはないものの、都会の喧騒から離れており、腰を据えて勉学・研究に取組むにはこの上ない街ではないかと思う。

私が現在所属しているのは先述したようにDTALと呼ばれる研究科であるが、これは旧言語学研究科と旧応用言語学研究科（RCEAL = Research Centre for English and Applied Linguistics)が今夏に合併して生まれた研究科であり、それまでは私はRCEALに所属していた。RCEALは博士課程の学生が20名ほど、修士課程の学生が15名ほどの小規模の研究科で、学部は存在しなかった。学部から直接進学する学生がいないことと学問の特性が相まって留学生率が非常に高く、ヨーロッパ諸国を中心に世界中から学生が集まっていた。DTALの応用言語学分野（＝旧RCEAL）の所属教員の専門分野は第二言語習得・心理言語学・計算言語学など多岐に亘り、そのため学生の研究分野も様々で、他分野の知識が得られて面白い反面、私と研究分野が似ている人はおらず指導教官以外に研究の相談をすることはほとんどないという弊害もある。

旧RCEALが含まれているEnglish Faculty Building

ケンブリッジ大学生は研究科のほかにCollegeと呼ばれるところにも所属する。研究科は主に勉学・研究の場である一方、Collegeは社交の場であると言われている。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

ケンブリッジ大学には計31のCollegeがあり、私はHughes Hallという大学院生と成人学部生専用のCollegeに所属している。私のCollegeには24時間使用可能な図書館と学習スペースがあり、私は授業や指導教官とのミーティングなどがない限りはそこで時間を過ごすことが多い。Collegeは住居も兼ねているが、Hughes Hallを含む多くのCollegeは学生数に比べて住居数が少なく、例えばHughes HallではCollegeの敷地内の建物に住めるのは最長1年間、敷地外にCollegeが有している住居に住めるのが1年間と決まっている。

勉学・研究

先述したように私の興味は学習者コーパスを用いた第二言語習得研究にあるのだが、その中でも博士課程では英語の文法形態素（-ing、-ed、-s、’s、冠詞など）習得における母語とインプットの役割を研究している。より具体的には、博士課程の前半でケンブリッジ学習者コーパス（Cambridge Learner Corpus）というIELTSやケンブリッジ英検の受験者の英作文を電子化した世界最大規模の学習者コーパスを用いて、(1)学習者の母語が異なれば文法形態素の習得順序（-ingは-edよりも先に習得される、など）は異なるのかどうか、(2)母語が英作文内の文法形態素の正確性に及ぼす影響は文法形態素間で異なるのかどうかを研究した。第二言語習得研究での定説とは異なり、母語が異なれば（例えば日本語を母語とする英語学習者とスペイン語を母語とする英語学習者では）文法形態素の習得順序が明確に異なること、母語の影響を受けやすい文法形態素とそうではない文法形態素があることを明らかにした。現在この研究結果を一本の論文にまとめ学術誌に投稿中である。博士課程の後半ではEF-Cambridge Corpusという学習者コーパスを用いて、上記の結果が縦断的データ（学習者を個人単位で追った時系列データ）でも観察されるかどうか、また文法形態素習得におけるインプットの役割はどのようなものかを研究している。

指導教官とのミーティングは学期中は典型的には週に一度、一時間ほど持っているが、これは他の学生と比較して多い方である。ミーティングでは基本的にはその週に行ったことを報告しフィードバックを得て、次週までに行うべき課題を話し合う。毎週何らかの報告をしなければならないので研究を進めるための良いプレッシャーになっている。また半年に一度、指導教官以外の教員も交えた公的な進捗審査がある。合否が出るわけではないが、それに向けて一定の成果を上げなければいけないので良いペースメーカーとなっている。

博士課程に占めるコースワークの割合は低い。博士課程の学生用の授業が年に3-4つ（1学期あたり1-2つ）開講されており、1年が3学期に分かれている内のいずれか1学期で何か一つ授業に出席しなければならない、という緩い制約があるのみである。それらの授業も特に課題もなければ出席をチェックされるわけでもない。またそもそも授業期間は8週間×3学期で24週間しかなく、1年の半分以上は長期休暇に当たる。そして授業期間中は外部からゲストを呼んで講演してもらうなど他の学術関連のイベントもあるが、出席は常に任意である。このように、少なくとも博士課程の学生は研

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

究に時間やエネルギーを注ぐことが可能であるし、またそれが望まれているように感じる。私も特に 1 年目と 2 年目の中頃までは私自身の研究関連のことを行うのに大半の時間を費やすことができた。

授業は必修ではないものの理論言語学・言語習得・心理言語学・神経言語学・コーパス言語学など多岐に亘って開講されている。またケンブリッジ大学が総合大学であることを活かし、私は今年度、コンピューターサイエンス研究科で自然言語処理関連の授業にも出席している。コーパス言語学は電子化された言語データを扱う文理融合分野であり、その理系部分も学びたいと考えたからである。学部も修士も分野が人文学系であった私には理解が難しい時もあるが、概ね楽しめている。来期も機械学習などの授業に出席する予定である。

授業のほかにもトレーニングの機会が多々ある。例えばケンブリッジ大学では毎日のように何かしらの講演会が開催されている。その中には第二言語習得や第二言語教育など私の興味の中心にあるテーマから、自然言語処理や心理統計のような周辺分野まで様々なトピックが含まれており、自身の研究に関連しそうであれば積極的に足を運んでいる。これらの講演会はtalks.camというウェブサイト[1]で一括管理されており、興味のある講演を探しやすいようになっている。また講演会だけではなく、具体的なスキルの習得のための講習会も多く開講されている[2]。プレゼンテーションの方法から統計手法まで様々あるが、私が特によく参加しているのはUniversity Computing Serviceという所で開講されているコンピューター関連の講習会である。ワードやエクセルの使い方といった基礎的な技術から、Pythonプログラミング、MySQLの使い方、MPIを用いた並列プログラミングの方法など色々な講座がある。これらは全てtransferable skills、つまり特定の分野に依らずに有益な技能という位置づけで、基本的には大学に所属している学生やスタッフであれば誰でも無料で受講することができる。

本セクションの最後に supervision について触れたい。ケンブリッジ大学の特徴の一つは学部の supervision というシステムにある。これは学部の授業の出席者を最大 6 人のグループに分け、1 グループにつき 1 人の PhD 学生や PhD 保有者が supervisor としてついて指導（主に課題へのフィードバック）や議論を行うというもの。今年度 RCEAL と言語学研究科が合併し DTAL となったことにより私の研究科にも学部生が在籍することとなり、私にも supervisor にならないかという声がかかった。大学入学システムの関係で大学院生とは違い学部生は大半が英国出身の英語母語話者である。留学生である私が彼等を相手に本当に指導・議論できるだろうかと少し躊躇したものの、面白い経験になるだろうと考え引き受けることにした。現在私が supervisor を務めているのは「Language, Brain, and Society」という言語習得・言語障害・心理言語学・社会言語学を 2 期（16 週間）で扱うという非常に幅が広い授業である。言語障害などは私の専門分野ではないので議論のネタ探しなどの supervision の準備は大変だが、良い経験になっているはずだと信じて行っている。

[1] http://talks.cam.ac.uk/
[2] http://www.training.cam.ac.uk/

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

留学の利点と反省点

私にとって留学の最大の利点は環境にある。ケンブリッジ大学では博士課程在学者の一定割合が4年以内にPhDを取得しない場合は研究科が研究費削減などの制裁を受けると聞いたことがある。そのためか前述したように博士課程の学生には研究に集中できる環境が与えられ、その代償として研究を進めなければいけないというプレッシャーは強い。周りの学生も大多数が3-4年でPhDを終えている。このような環境に身を置くことにより、研究を進めなければいけない、論文を書かなければいけないという気持ちを常に持ち続けられるのは留学している利点である。

しかし大学やコースによるのだろうが、可能であれば博士課程と同じ場所で修士課程を修めた方が良い場合が多いのではないかと思う。旧RCEALは博士課程への直接入学をほとんど受入れていなかったため、周囲はRCEALで修士号（MPhil）を取得した学生ばかりであった。そしてRCEALでの修士課程のコースワーク（理論言語学が中心）と私が日本で受けた教育（英語教育が中心）の間にズレがあるため、私と他の学生では共通の土台を持っておらず、話が噛み合わないことがある。

また、私は奨学金の合否が8月中旬まで分からなかったため1月に入学したのだが、可能であれば通常の年度始まりである10月にスタートした方が良かった。前述したように英国の博士課程ではコースワークがほとんどないため、そのタイミングを逃すと同じ研究科に所属する学生とすら知り会う機会をあまり持てない。社交場であるはずのCollegeも新入生歓迎イベントは10月に集中しているので、1月入学だとやはり同じCollegeに所属している他の学生と知り合う機会がそれほどない。これらは留学の準備段階で十分に調べきれていなかった点である。

末筆となったが、ケンブリッジでの充実した研究生活は家族や友人、私が修士課程を修めた東京外国語大学の先生方、現指導教官の支援や応援、またJASSOの奨学金があって初めて実現したことである。ここに改めて感謝申し上げたい。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.